

# 植生からみた福生の自然

——樹林を中心にして——

宮岡一雄

## はじめに

ある地域に生育している植物の総て（現存植生）は、植物生態学的な環境（地形・地質・気候）によって支配されている。それによって植生域が定まり、その規制のもとで地域に適合した植物的自然が形成される。しかし、そのような自然（自然植生）を現実期待することはむずかしい。人為的干渉によって自然植生は変貌するので、現存植生との間には喰いちがいが生れてくる。

環境的に『あるべき姿』としての自然植生は、人間がこれまでどう植生に係わってきたか、現にどんな係わり方をしているかによって現存植生の様相を異にする。一般的に言えば、自然植生から代償植生へ、さらに無植生へと進行してゆく。すなわち、自然林から二次林・植林へ、やがて

二次草原に向い、さらに耕地植生に達して遂には裸地に至る。したがって、現存植生は、過去と現在との社会状況を反映して植物社会（群落）をつくっている。

## 福生周辺の多摩の植生

福生周辺の植物的自然の様子を知るために、多摩地域の現存植生を概観してみよう。

多摩地域を地形的にとらえると、山地・丘陵地・洪積台地の三つに分けることができる。このうち、三つの丘陵地（加治・狭山・草花）は鮮新世の砂岩、泥岩、礫岩からなり、他の二つの丘陵（多摩・加住）と武蔵野台地は関東ローム層で被われている。この地域は、年平均気温一四・二度、暖かさの指数一一四・二度、寒さの指数マイナス三・六度、年間降水量一五四三ミリメートルの気候である（八王子第

四中学校観測資料から算出)。これらの環境は、多摩地域が植生生態学的にみて暖温帯植生域にあることを示している。この領域では、照葉樹(シラカシ・スダジイ・ツバキなど)の優先する自然植生がみられてよいところである。しかし、現実にはそれと異なった植生がみられている。

「東京都現存植物図5」によれば、多摩地域には三五種の群落がある。植生の豊かな地域(自然度V)は、限られた場所に断続的に分布し、断崖・段丘崖線・丘陵地の一部・旧街道筋・多摩川中流域にみられる。また、普通にわれわれが出合う雑木林(二次林)のある地域(自然度IV)は、台地・段丘面・丘陵地の各所に散在的にひろがっている。樹木のほとんどない草地(二次草原)の地域(自然度III)は、多摩丘陵の一部・耕作放棄畑・グラウンドなどによくみられる耕地植生のある地域(自然度II)は、畑地や多摩川底地の農地にみられる。植物的自然が殆んど失われてしまっている植生裸地の地域(自然度I)は、市街地の住宅地や工場地となっている。

これらの生育地をみると、それぞれの場所の植生に特徴がみられる。段丘崖では、崖線に添ってシラカシ・ケヤキの優先する林があり、丘陵地では、山林としてシラカシ・ハンノキが、旧街道筋では、屋敷林としてシラカシ・ケヤキの優先する林をつくっている。多摩川では、中流域の河辺植生としてヤナギ類・オギ・ツルヨシが繁茂している。

台地では、平地林としてコナラ・クヌギ・エゴノキ・クリなどの雑木林が中心になっており、二次林の丘陵地では、クリ・エゴノキが多くみられる。この丘陵地の山林では、アカマツ林(加治・狭山の二丘陵)、コナラ林(草花・加治の二丘陵)、クヌギ林(多摩丘陵)など地域性をもった林が目につく。多摩丘陵の一部や多摩川の堤防・土手では、ススキ・チガヤなどの草地が、耕作放棄畑や造成地では、ヒメムカシヨモギ・アレチノギクなどの雑草地がひろがっている。農耕地では、ホトケノザ・ミミナグサ・メヒシバ・スベリヒユなどが雑草群落をつくり、その一部では、果樹のクリ・ナシ・ウメなどが植えられている。

### 福生の環境と林地の状況

福生の環境が、植生生態学的にみてどのようなものであるのか、林地との関連を概観してみたい。

まず、福生の地形をみると、立川段丘(海拔一四三一一三メートル)、拝島段丘(海拔一三七一一一三メートル)および低位段丘から成り立ち、東から西へ階段状に並び、多摩川に向かって傾斜している。これらの段丘は、高さ一二一一三メートルから数メートルの崖をつくり、それによって帯状の崖線を発達させている。この崖の斜面は、多摩川の地史的な西進によってつくられたもので、地形的に変化に富んだ生育環境をもたらし、多様性のある崖線林を形成するの

に役立っている。一方、地質的にみると、立川段丘は上位立川ローム層（厚さ一・五—二・〇メートル）に被われ、拝島段丘と低位段丘は洪積世の表土堆積物、多摩川低地は沖積層から成り立っている。これらは、いづれも福生の基盤地質（加任礫層）上に堆積して各段丘礫層を被う形をとっている（「福生の地質」福生市文化財報告による）。次に気候をみると、年平均気温一三・一度、暖かさの指数一一五・一度、寒さの指数マイナス二・九度、年間降水量一三七八・三ミリメートルとなっている（一九八〇、一九八一の二ヶ年平均—横田基地分遣隊・都環境保全局の資料から算出）。この環境下での中核をなす植生地は林である。

福生の林地は、市の面積の約三・三パーセントで、その三分の二は崖線林が占め、残り三分の一を平地林が占めている。これらの林地に生育している野生樹木は、全部で約四万本あり、崖線に約二万七六〇〇本、平地に約九八〇〇本、残余は小林地に分散して生えている。総個体数の五八・三パーセントが崖線林（拝島段丘が三一・九パーセント、立川段丘が二六・四パーセント）で、四一・七パーセントが平地林（立川段丘）で生育していることになる。

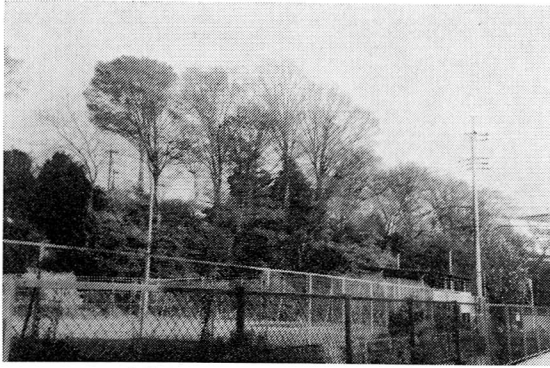
福生の林地を集団として大別すると、横田基地南を中心とする平地林、加美平から拝島駅北に連らなる崖線林、羽村界から熊川南に連らなる崖線林の三つになる。立川段丘の平地林とその崖線林とは類似した植生を示し、武蔵野台

地に一般的にみることのできる二次林（主にクスギ・コナラ群集コナラ・エゴノキ群落）を形成し、拝島段丘の崖線林（低位段丘を含む）では、宮本橋以北の二次林（クスギ・コナラ群集コナラ・イヌシデ群落）と熊野橋以南の準自然植生（シラカシ群集ケヤキ亜群集）との異なる自然度の林が形成されている。

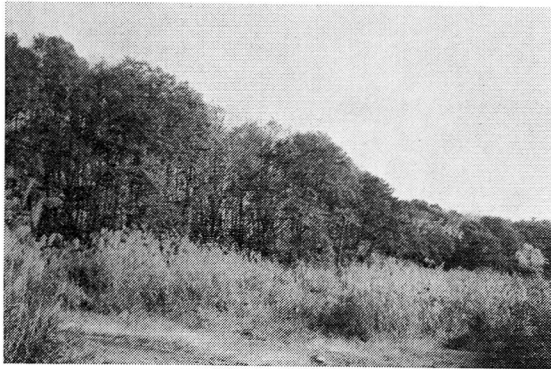
今日、各地で林地が減少しているが、福生でも一九三七年に全市の約三〇・〇パーセントであった林地が、一九七六年には約三・三パーセントにまで低下している。こうした趨勢にあるなかで、自然植生に近い状態の植生を維持している拝島段丘の崖線林は貴重な存在である。この崖線は急な斜面からなり、人為的干渉の度合いが小さく、植生の生態的均衡を保つ上で有利に作用したと推測できる。また、拝島駅北の雑木林は、比較的豊かな林相の二次林で、林床に多くの植物が生えている。この林は、その位置（八高線・青梅線・五日市線に囲まれた地域）に恵まれたこともあって、人為的な干渉を避けえたという事情が幸いしたと考えられる。

しかし、他方で、崖線林の抱えている地勢的条件には厳しいものがある。すなわち、南北に帯状に走る崖線と東西を結ぶ交通路とが交差せざるを得ない状況に置かれている。たとえば、長さ三キロメートルにおよぶ拝島段丘の崖線林では、主な交差地点だけでも一五ヶ所（新堀橋・砂利線橋・

宮本橋・宿橋・新橋・清岩院橋・熊野橋附近・第七小学校裏・牛浜坂・辛楽園下・五日市線・福生院下・清水坂・熊川神社下・熊川新坂)に達する。こうした事情によって、崖線林の分断、細分化がおこり、孤立性を次第に強めて局所的に気象上の変化を招き、樹林の植生にとっての生態的環境を不利に導いている。このことは、植生の単純化を進行させ、林相の単層構造をもたらし、崖線林の安定性を弱めてゆく危険をもっている。



自然度 V シラカシ群集ケヤキ亜群集  
(ホタル公園附近の崖線林)



自然度 IV コナラ-エゴノキ群落  
(拝島駅北側の崖線林)



自然度 IV 平地林の林床植生  
(横田基地南側の二次林)

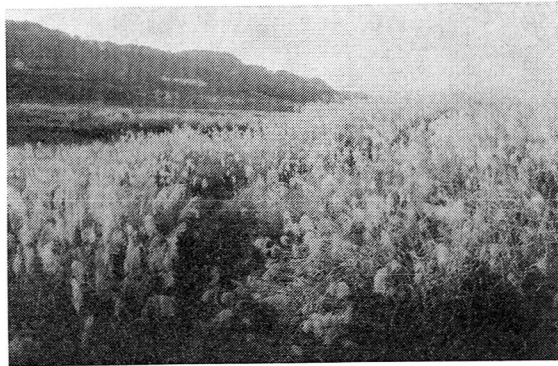
### 現存植生からみた自然度

市内の現存植生を調査してみると、場所によって自然度にちがいのあることが認められる(自然度は、IからVに向って、より豊かな植生にあることを示す。—写真参照)。

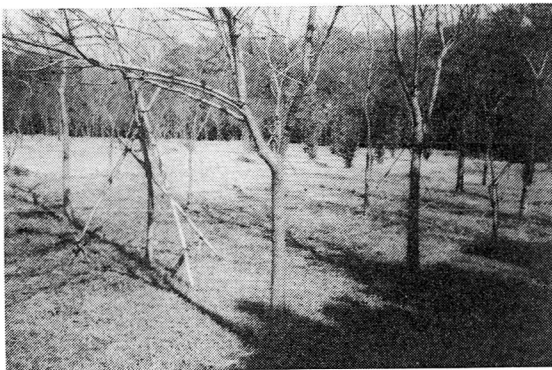
自然度V(自然植生に近い林)の場所は、新橋南寄りの屋敷林(シラカシ-ケヤキ屋敷林)と熊野橋以南の拝島段丘の崖線林(シラカシ群集ケヤキ亜群集)の二ヶ所である。この



自然度 IV 崖線林の林床植生  
(カニ坂公園北の二次林)



自然度 III ススキーチガヤ群落  
(多摩川辺りの二次草原)



自然度 II 植木苗圃  
(福東地区の耕地植生)

崖線の一部にあたるホタル公園附近と清水坂―熊川神社下の植生の密な林(シラカシ群集典型亜群集)は特に常緑樹が多い。この屋敷林ではクス・シラカシ・イヌツゲがあり、この崖線林ではシロダモ・アラカシ・アオキなどが目立っている。かかる林は、一般的に常緑樹が多いため林内が暗く、林床にはリュウノヒゲ・ヤブラン(屋敷林)やシダ類(崖線林)が生えていて、高木層から林床植生に至るまで植生階層がよく整い、多層構造である。尚、ここにはケヤ

キヤムクノキなどが混生しているため、林冠が雄大である。自然度 IV (普通にみられる雑木林)の場所は、平地林と崖線林に分けられるが、ここでは二次林(クスギーコナラ群集)と僅かに植林(スギ・ヒノキなど)がみられる。横田基地南の林ではエゴノキが多く、拝島駅北の林ではコナラが優先している。この二種は、各所で二次林の主要な樹種の地位にあるが、図書館・原ヶ谷戸周辺の林ではクリ・クヌギが、カニ坂公園北の林ではイヌシデが主要な樹種となっている。

これらの高木・亜高木が、地域性のある林の特徴を規定している。

自然度Ⅲ—Ⅰは、草本植生であるが、福生全域の植生を概観する意味で触れておくことにする。自然度Ⅲの場所は多摩川沿いと河原によく発達し、二次草原を形成して堤防の草地（ススキ・チガヤ群落）や中州の草地（オギ・ツルヨシ群落）をつくっている。また、グラウンド・公共広場・住宅周辺の空地などで踏跡群落をつくり、河川敷畑や造成予定地では耕作を放棄した草地がみられる。自然度Ⅱの場所は、耕地の雑草を中心にした植生で、田畑の減少によってみられなくなり、一部の地域（加美・福東・熊川南）に僅かにあるに過ぎない。自然度Ⅰは殆んど植生のみられない場所であり、市街の中核域がそれにあたり、住宅地のうち旧集落（長沢・永田・中福生・原ヶ谷戸・熊川旧奥多摩街道筋・熊川南）などは「緑の多い住宅地」（自然度Ⅰの中で、最も樹木の多い領域）として健在である。

このように福生全域の現存植生をみてくると、自然度Ⅴの場所は限られていることがわかる。総対的に林地面積が少なく、現存植生が乏しいので、林地は緑の給源地として貴重になってきている。しかし、福生の林は崖線林の占める割合が高く、点状・線状に分布する傾斜林地が多いため、林床植生が貧化したところがある。これは林の維持にとって苦しい状態にあるといえよう。

## 樹種の構成と林

樹種の現存数（表1参照）から林の構成をみると、それによって林相のちがいが明らかとなる。

エゴノキ・コナラの二種は、数量的に一位、二位を占め、それぞれ六〇〇—七〇〇本を超え、他の樹種とくらべて抜群の個体数である。しかも分布域が広く、全調査区五二区のうち二七区において優先種の地位にある。個体数で三位から八位までの六種（イヌシデ・アオキ・ガズミ・ケヤキ・クリ・クヌギ）のうちで、最も個体数の多いイヌシデでさえも約一七〇〇本に過ぎず、他の五種はいずれも約一〇〇〇本—一〇〇〇本台にとどまっている。ここで、一種五〇〇本以上の上位一五位までの樹種について、数量的な割合をみると、全野生樹木数（約四万本）に対して、上位二種で三四・五パーセント、上位八種までで五三・一パーセント、上位一五種までで六五・七パーセントを占めている。このように、上位二種だけで全体の三分の一以上の個体数を占めており、上位八種で過半数になる。この八種のうち六種（アオキ・ガズミを除く）までは高木、亜高木であるが、九位から一五位までの樹種は殆んどが灌木（エノキを除く）に属して林の低木層を形成する役割をもっている。

ここで、立川段丘・同崖線と拝島段丘・同崖線の二地域に分けて比較すると、それぞれの地域によって樹種の占め

表1 主要樹種の個体数(本)

樹種名	全域	立川段丘(A)	拝島段丘(B)	(A) : (B)
コナラ	7120	5200	1920	2.7 : 1
エゴノキ	6700	5490	1210	4.5 : 1
イシデ	1740	1010	730	1.4 : 1
アオキ	1180	—	1180	— : *
ガミ	1180	570	610	1 : 1.1
ケヤキ	1170	110	1060	1 : 9.6
クマシロギ	1120	870	250	3.5 : 1
クヌギ	1030	680	350	1.9 : 1
ムササビ	890	190	700	1 : 3.7
クサギ	740	—	740	— *
エノキ	730	100	630	1 : 6.3
チャ	720	—	720	— *
カマツカ	690	280	410	1 : 1.5
イボタノキ	680	280	400	1 : 1.4
ヌルデ	590	310	280	1.1 : 1
ツバナ	500	330	170	1.9 : 1
ヒノキ	450	190	260	1 : 1.4
アラシ	400	—	400	— : *
シロダモ	390	—	390	— : *
ヤマツツジ	390	390	—	* : —

註. 樹種: 上位20種, 本数: 10本以下4捨5入, \*: 一方にのみ生育.

ている割合がちがってくる。前者の地域には全部で一一三種の樹木が生育しているが、エゴノキ・コナラの二種で四九・四パーセントを占め、後者の地域には二一二種が生育しており、この二種で一六・四パーセントを占めているに過ぎない。この傾向は、前述の上位八種が占める割合でも

同様であり、前者の地域では六八・二パーセント、後者の地域では三八・四パーセントである。このように、同一の樹種であっても、生育地によって数量構成上に占める割合は大きくちがっている。この数値の差は、地域によって樹種構成の異なることをあらわしている。前者の地域の林は、

特定の樹種を中心にして成り立っており、後者の地域の林では、立地の環境の多様性に対応する形で、より多くの樹種から成り立っていることを窺わせている。

たとえば、前者の平地林では、エゴノキ・コナラが高木層を占有して整一な林冠を呈し、武蔵野の雑木林とよく似た林相をしているが、後者の崖線林では、ケヤキ・ムクノキが高木層を形成し、亜高木層にアラカシ・シロダモ・ヤブツバキなどがあって、重層構造からなる立体的な林相を呈している。こうした林相構造のちがいは、低木層の樹種をみても判っきりとわかる。上位五〇種の中に低木が二四種あるが、前者の地域の林では、そのうち一三種が生育しており、ヤマツツジ・ニシキギ・コゴメウツギなどの落葉性灌木が主となっていて、常緑性灌木は一種だけ含まれているに過ぎない。ところが、後者の地域の林では、低木一六種が生育しており、

その中にアオキ・イヌツゲ・ヒサカキなど四種の常緑性の灌木がある。

このように、前者の地域の林は、特定の樹種に依存した形で林が成り立ち、単純な構造の林になっているが、後者の地域の林は、多種類によって支えられ、多様性のある複相構造の林になっている。この林相の地域的ちがいは、一方の林地が平坦で環境が画一であるのに対し、他方の林地が崖からなっていて、地形的変化に富み、局所的気象変化がみられ、生育環境が多様であるためと考えられる。

### 常緑樹と林の緑度

林地植生の自然度を高めているものの一つに常緑樹がある。その意味で、林の常緑樹率の高低は、その林の自然度を推測する指標となる。この観点から、前項と同様に、上位五〇種を対象にして地域的な常緑樹率を比較してみよう。立川段丘・同崖線の地域には、この五〇種のうち三二種が生育しているが、その中に三種の常緑樹がある。これを数量的な常緑樹率で見ると、平地林で二・〇—三・〇パーセント、同崖線林で四・〇—一二・七パーセントになる。他方、拝島段丘・同崖線の地域には三八種が生育しているが、その中に一一種もの常緑樹が含まれており、数量的に常緑樹率を計算すると三〇・〇—四七・六パーセントの高率になる。全林地のうちで、最も常緑樹率の低かった林は横田

基地南の平地林で二・〇パーセント、最も常緑率の高かったのは、熊野橋—熊川新坂間の崖線林で三七・〇パーセントであった。この崖の一部には四七・八パーセントと極めて高い常緑樹率を示した調査区もみられた。常緑樹率の低い林では、落葉樹四九本に対して常緑樹一本の割合になり、常緑樹率の高い林では、常・落比が二対一から一対一で、両地域の林は対照的な様相を呈している。

このような樹林構成のちがいは、種類数の上からも認めることが出来る。前者の地域では、一調査区あたり四〇—八五種（例外として拝島駅北の林一一二種）が出現し、そのうち常緑樹はほとんどが植樹（マツ・スギ・ヒノキ）によるもので、野生種は一種（ヤマコウバシ）に過ぎない。他方、後者の地域では、一調査区あたり七〇—一四〇種が出現し、そのうち常緑樹が一一種にも達している。しかも、この中には中層木のアラカシ・シラカシ・シロダモなどが含まれている。

さらに、片域的植生樹（一方の地域にのみ生育している種）をとってみても、地域的に常緑樹の出現度が異なっている（表2参照）。上位五〇種の中から片域的植生を示した樹種を選び出してみると、前者の地域では一〇種約二三八〇本となり、そのうち常緑樹は一種一七〇本、後者の地域のそれは一三種、約四六〇〇本で、そのうち常緑樹が八種約二九四〇本となっている。片域的植生樹の構成からも、両地



域の林のちがいが明瞭にみとれる。  
 以上の点にみられた常緑樹の地域的ちがいは、その林地の林相を強く特徴づけて、その林の視覚的緑度（緑の濃さと深さの印象）をも左右する。この観点から、樹種の種類

表2 片域的植生の樹種と個体数（本）

立川段丘・同崖線		拝島段丘・同崖線		備 考
ヤマツツジ	390	アオキ	1180	○個体数50位以上の樹種を表示した。 ○チャ、スギ、ソメイヨシノ、タカオモミジは除外した。 ○●印は常緑樹 ○10本以下の単位は4捨5入した。
ソヨゴ	380	クサギ	740	
ハリエンジュ	310	●アラカシ	400	
ニシキギ	220	●シロダモ	390	
ヤマウルシ	220	マルバウツギ	260	
ヤマザクラ	210	ムクノキ	250	
アカマツ	190	タラノキ	230	
●ヤマコウバシ	170	●イヌツゲ	210	
コゴメウツギ	160	●ヒサカキ	200	
ネムノキ	130	●シュロ	200	
		ニワトコ	190	
		●ヤブツバキ	180	
		●シラカシ	180	

表3 林の緑度

林 地		順位	種数	常緑樹率	備 考
立川段丘・同崖線	拝島駅北側の林	3	111	12.7	○10位真福寺周辺の林は都道により消滅した。 ○緑度12位までの林を表示した
	福東地区の分散林	8	77	3.2	
	図書館周辺の林	9	50	11.8	
	原ヶ谷戸周辺の林	11	40	4.0	
横田基地南側の林	12	59	2.0		
拝島段丘・同崖線	熊川地域崖線林	1	143	37.0	
	屋敷林（新橋南寄り）	2	106	47.6	
	多摩川断崖林（長徳寺附近）	4	69	34.6	
	熊川団地下崖線林	5	68	30.3	
	羽村界雑木林	6	84	5.0	
	上水辺の林（熊野橋一五丁橋）	7	51	14.9	

数、個体数その他を加味して調査域一八区（二調査域は平均三調査区分）の緑度を対比してみると、一位から七位までが拝島段丘の崖線林で占められ（例外 拝島駅北の林）、立

川段丘の平地林や崖線林は七位以下であった(表3参照)。

### 群落型と林の特徴

福生の林を植生型(植物社会の分類)からみれば、「自然植生またはそれに極めて近い植生」(シラカシ群集ケヤキ亜群集)と「代償植生の二次林」(クスギーコナラ群集)に大別できる。前者に該当する地域は、拝島段丘崖線林の熊川寄りの林、後者に該当する地域は、立川段丘面・同崖線および拝島段丘崖線の一部の林である。

これを群落の種類に分けて概観してみることにする(表4参照)。林地を一八区に分けた調査域単位で群落をとらえると、全域で一種類の群落(エゴノキーコナラ・コナラーエゴノキ・コナラークリ・コナラーイヌシデ・エゴノキーケヤキ・シロダモーケヤキ・ケヤキークヌギ・ケヤキーアラカシ・ケヤキ・コナラ・植林)が認められた。このうち、エゴノキーコナラ群落は五ヶ所、コナラーエゴノキ群落は四ヶ所、その他の群落が各一ヶ所のみであった。樹種ではコナラが一二ヶ所、エゴノキが一〇ヶ所、ケヤキが三ヶ所で群落の主要樹となっている。

さらに、林を小規模に分けて観察すると、より多くの群落をみる事ができる。林地を五二調査区に小区分して考察したところ二四種の群落に分類することができた。地形のちがいが、人為的干渉の度合いなどによって、群落の種類

表4 林地と群落

林地	群落の種類	種数
立川段丘	平地	エゴノキーコナラ, コナラーエゴノキ, エゴノキークリ 3
	崖線	コナラーエゴノキ, エゴノキーコナラ, クリーエゴノキ, クリーコナラ, エゴノキークリ 5
拝島段丘	上水	コナラークリ, エゴノキーケヤキ, ケヤキーエゴノキ, ケヤキーヒノキ, 植林(スギ・ヒノキ) 5
	崖線	コナラーイヌシデ, ケヤキーアラカシ, ケヤキーエノキ, ケヤキームクノキ, コナラーシロダモ, アラカシーシロダモ, シロダモーエノキ, エノキーコナラ, エゴノキーコナラ, ケヤキ, アラカシ, コナラ, クスギ, (ソメイヨシノ) 14

註. 調査区数: 立川段丘・平地林—11調査区, 同崖線林—13調査区, 拝島段丘・上水辺—7調査区, 同崖線林—21調査区

は様々に異なってくるが、立川段丘の平地林では三群落、同崖線林では五群落がみられ、上水辺りでも五群落が認められた。また、拝島段丘の崖線林では樹林構造が多様のため一五群落がみられた。群落名に登場する樹種は一三種（コナラ・エゴノキ・ケヤキ・アラカシ・クリ・イヌシデ・エノキ・シロダモ・クヌギ・ムクノキおよび植林のスギ・ヒノキ・ソメイヨシノ）あるが、このうち、立川段丘・同崖線の林では四種が、拝島段丘の崖線林では一一種が群落を代表する樹種となっている。

立川段丘・同崖線の二四調査区でみられた群落七種の出現度をみると、エゴノキ・コナラ群落・コナラ・エゴノキ群落が各九ヶ所で、その他の群落五種が各一ヶ所でみられた。他方、拝島段丘・同崖線の二八調査区でみられた群落一五種の出現度をみると、コナラ・イヌシデ群落が四ヶ所、エゴノキ・ケヤキ群落・アラカシ・ケヤキ群落が各三ヶ所、ケヤキ・エゴノキ群落が二ヶ所でみられ、その他の群落九種は各一ヶ所でみられるだけであった。林地全域五二調査区で二四種の群落が認められたが、そのうち、コナラ・エゴノキ群落とエゴノキ・コナラ群落は福生の林を代表する群落である。この両群落は、全林地五二調査区の三八・五パーセント、立川段丘・同崖線二四調査区の八三・三パーセントに出現してくる。

こうして群落を類別してみると、横田基地南の平地林の

ように三樹種三群落を中核として成立している林から、熊野橋―熊川新坂間の崖線林のように一一樹種一五群落を中核として成立している林まで、林の構造は様々である。

### おわりに

林の現存植生を中心にして分析を行い、やや細目に触れたため、幅濶した論旨になったが、福生の林の生態的な実態を紹介したつもりである。植生は、人為的干渉が加えられなくとも、自然に極相（最終段階の植生）に向って遷移してゆくが、人為的な環境の悪化は、生態的均衡を失った植生をつくり出して植物的自然の消滅につながってゆく。すなわち、植物社会の安定を欠き、環境抵抗（外的環境の植生への作用）に対する耐性を弱める。生態的均衡を維持するには植生の多層構造を保つ必要がある。

現時点で、植生構造が豊かで自然度の高い林を挙げらば、ホテル公園周辺の林、清水坂―熊川神社下間の林、第五小学校脇の崖線林、拝島駅北の鉄道周辺の林および新橋南寄りの屋敷林の五ヶ所となる。これに加えることならば、カニ坂公園以北の林の一部を挙げることができる。これらの林地の主な林は崖の斜面にあり、狭小で脆い地形を抱えている。これらの林も、次第に林床植生が貧化しており、植生の単純化が進行している。これを防止することが緑の給源地の保全につながって行くことになる。

〈参考文献〉

- 一、檜山庫三著「武蔵野の植物」(一九六五年、井上書店)
- 一、奥富清・辻誠治著「植生自然度による地域自然性の解析」(一九七三年、東京農工大学演習林報告10号)
- 一、奥富清・辻誠治他「東京都現存植生図5」(一九七四年、東京都公害局)
- 一、宮岡一雄他「多摩川沿域の樹木・竹類」(一九七五年、福生市文化財報告No.5・福生市教育委員会)
- 一、奥富清・辻誠治著「多摩地方における暖温帯自然林の植物社会学的研究」(一九七五年、東京農工大学演習林報告12号)
- 一、奥富清・辻誠治・小平哲夫著「南関東の二次林植生」(一九七六年、東京農工大学演習林報告13号)
- 一、武南馨・徳永重光他「福生市の地質」(一九七九年、福生市文化財報告No.10・福生市教育委員会)
- 一、宮岡一雄他「市街東側地域の樹木・竹類」(一九七九年、福生市文化財報告No.11・福生市教育委員会)

(みやおか・かずお 市史編集専門委員・明治大学教授)